特集記事

とうほう地域総合研究所 定期講演会

〔講 師〕柳澤　秀夫
ジャーナリスト

不透明な世界　問われる日本　～どうなる世界　どうする日本～

皆さん、こんにちは、柳澤秀夫です。会津の生まれで、小さい頃から年寄りに、会津の男は、人前でぺちゃくちゃ喋るもんじゃないというふうに言われて育ってきたはずだったんですが、たくさんの皆さんの前でお話、あるいはテレビでお話をするような仕事に何の因果か就いてしまいました。今日は「不透明な世界　問われる日本　～どうなる世界　どうする日本～」というテーマで、これから先どうなるか分かりにくい時代にどうやったら我々は生き残っていけるのか、そのための何かヒントや手がかりはないのかということを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。ちなみに最初に答えを申し上げます。キーワードは「情報」です。決断をするためには材料が必要です。それがなければ決断ができません。つまり、情報をどうやって集めればいいか、集めるだけではなくてそれをどう評価し、それを行動に結びつけていくか、まさに今の時代というのは、この情報をうまく味方につけることができるかどうかによって、これから先、生き延びていくことができるかどうかが決まるような時代と言っても過言ではないと思います。

私はマスメディアの世界に身を置いて今年で47年になります。1977年にNHKに入社し、記者として横浜、沖縄、東京の国際部、その後はアジア、中東アフリカなど主に海外での取材を重ねてまいりました。私はどちらかというと、小さい頃から野次馬で何かことが起きると何が起きてるのか見たい、知りたい、聞きたい、場合によっては触ったり味わってみたいという野次馬根性の塊みたいだったものですから、こういう仕事を選んだわけです。記者生活の大半は紛争地帯、あるいは戦争を渡り歩いてきました。ですから、どちらかというと外を駆けずり回るのが私の仕事だったわけですが、今から6年前、NHKを65歳で定年退職をして、今は民間放送の番組で、情報番組あるいはニュース番組でコメンテーターをしています。

不透明な世界

皆さん今年世界で一番不透明なことは、何だというふうにお考えでしょうか？いろいろあると思いますが、私はアメリカの大統領選挙だと思います。11月5日投票日ということになっていますが、

ご存知の通り、現職のバイデン大統領、それから前職のトランプ大統領との一騎打ちになるという構図はもう固まってます。トランプ前大統領77歳、バイデン現大統領81歳の対決ということになります。どちらが大統領になるかによって、世界中、特に日本も大きな影響を受けます。アメリカの社会を見るときに、我々は頭で、日本人の常識で、アメリカの社会っていうことを考えがちです。そうすると、どう考えても、我々一般の常識から考えれば、バイデンとトランプどっちがいいって言われたら、トランプよりはバイデンがいいだろうというふうに思いますよね。ところが、アメリカの今の状況というのは、分断と言われてますけど、民主・共和、バイデン・トランプ、ほとんどフィフティーフィフティーです。なんでアメリカの人は、我々から見て理解出来ないと思うトランプを支持するのだろうって思いますよね。つまり、アメリカ人は我々が思ってるような感じで政治や社会を見てないっていう、やはり経済的にこれまで格差が生じてしまって、勝ち組ではなくて、負け組になったような人たちにとってみれば、これから状況を変えてくれるんじゃないかっていう、トランプ氏を支持するという空気がアメリカの社会の中にあるわけです。つまり、アメリカの政治を見るときにワシントンを見てもわからない、むしろアメリカのいろいろな州、地方に行って、そこに生活する人たちがどういうふうに思っているかということをしっかり我々は受けとめないとアメリカの本質も見えてこないっていうことだと思うんです。なかなかそうは言っても、実際足を運んでみることはできませんけれども、そういうときにどうしても必要になるのは、海外の情報をどうやって集めるかっていうことなんですけれども、なかなか日本にいるといろんな情報は集まりません。でもそこを何とか風穴を開けて探すしかないわけですけれども、そういうときに、先ほどお話したキーワードの情報というものをどうやって集めるかということになります。

情報を正しく収集し評価する

NHK の記者としての初任地は横浜でした。記者の駆け出し時代っていうのは警察の取材をします。これでいろいろと鍛えられるわけです。なぜかというと、警察が扱う事件事故っていうのは捜査に関係しますから、犯人を逮捕しなきゃいけないから、警察官も情報をそう簡単には公開してくれません。そうじゃないと犯人を取り逃がすことになりますからね。我々記者の仕事というのは、その情報をこちらから取りに行き、それで他社を出し抜いて特ダネを書くんです。情報を守る側に、こちらが攻めていくわけですからそう簡単には取れません。でも昔は、いい時代だったんです。私が記者になった頃は、警察無線って簡単に聞けたんです。どこで事件があった、事故にあった被害者が誰か、どこまで追い詰めたかという情報も警察無線で頻繁に伝えていました。これは、野次馬からみると非常に醍醐味がありました。本当にパトカーや捜査員が走って犯人を追い詰めているシーンを、無線で聞けるんですよ。それで事件があると大概私どもっていうのは、警察の通信指令室に電話して、「パトカーが走ってたみたいですけど何かありました」って、いわゆる御用聞きのように電話を入れて、最初にいろいろ聞くんです

けど、そのときに通信指令室の窓口の人が、大概言うんですよ、「警察無線聞いてください、その方がはっきりしますから」って言う時代だったんです。でも今はどうでしょう。警察無線だけじゃありません消防無線もそうです。公共交通機関で使ってるような無線もほとんどデジタル化されて、一昔前のその手に取るような醍醐味というのは、無線では味わえなくなりました。でも当時から、いわばそういった警察の情報があっても、裏を取らないと駄目なんです。身の回りにあるものについて最終的にそれが本当か嘘かってことを確認するのは、対面なんです。警察無線じゃないんです。一番肝心な部分っていうのは人と人との接触の中でしか生まれない、肝心な情報は普通の一般社会の中で、営業の仕事と極めて似ていると思います。何年か前、私が車を買い換えるとき、何社か近くのディーラーに電話をかけ、インターネットでもパンフレットを取り寄せたんです。その時に、今乗ってる車の会社、自宅から車でも10分ぐらい離れたところにあるディーラーの営業の人が、自転車を漕いで我が家まで、パンフレットを持って来てくれました。その瞬間に、いくつか候補がありましたが、ここの車を買おうと決めました。インターネットで申し込みすると、パンフレットは送ってきてくれます。でも電話もありません。しかしそのディーラーの営業の方は、汗を流しながら自転車を漕いで、パンフレットを持ってきてくれました。それでもう決まりだなと。つまり、人間ってやはり人と人との接触の中で、相手の懐の中に飛び込んで曖昧ぼんやりしてるものが固まってくる。これは記者の取材と営業の仕事も全く同じだなってことを実感しました。

情報には、二つの種類があります。一つは「インフォメーション」、たくさんの人に知ってもらうための情報、例えばホテルのインフォメーション、あるいは国や自治体が、住民に知ってほしい情報です。もう一つは、「インテリジェンス」、秘匿すべき重要な情報、諜報です。

情報の集め方、集めるにはどうすればいいか、「インテリジェンス」は懐に飛び込まないと取れない。最後は、やはり人と人との触れ合いの中でしかその情報が正しいか間違ってるかどうかの判断はできない。決してこれはパソコンの中では判断がつきません。電話で、あるいはSNSが発達してるからといっても、相手の顔色が見えなかったら裏は取れません。文字情報だったり電話だったりしたら、相手の目の動き、顔色わかりませんよね。差しで会ってるからこそ、相手がどういう思いで自分と向き合ってくれてるか、その情報の真偽を確かめることができるということになるわけです。

キーパーソンの動きの重要性

情報の世界、インテリジェンスの世界というのは表とは全く違う動きをします。様々な出来事の中には必ずキーパーソンがいます。決してメインではないかもしれないけど、その中で重要な役割を果たす人は必ずいます。そういう人の動きを見ていると、この後事態がどういうふうに動くかっていうことを見極める上で大いに参考になると思います。これ実は時代をさかのぼって、私の生まれの会津でも、幕末の時代にもありました。「蛤御門の変」(注1)の前まではですね、会津と薩摩というのは一緒でした。それで長州に向き合ってました。その後、坂本龍馬が薩長同盟という枠組みを作って、会津は薩摩と袂を分かち、敵対関係になるわけです。あの時代、会津藩に秋月悌次郎という人がいました。公用方で、今で言えば外交官です。他の藩との交渉だとかあるいは情報交換す

(注1)：京都から追放されていた長州藩勢力が、会津藩主で京都守護職の松平容保らの排除を目指して挙兵し、京都市内において市街戦を繰り広げた事件

る窓口でこの秋月悌次郎という人は、若かりし頃、藩命により、西国、長州だとか、それ以外の九州地方も行脚しています。そこでいろんな人脈を作り、もちろん薩摩にも行ってます。会津と薩摩との間の交渉に当たった秋月悌次郎の尽力により盟友関係が深まって、「蛤御門の変」までは共同歩調が取れていた。ところが、非常に出来すぎた人だったようです。周りからの妬みもあったんでしょうね、左遷される羽目になって蝦夷地に送られました。その間に、坂本龍馬が動いて、薩長同盟が出来上がったんです。会津藩も慌てて急遽、秋月悌次郎を呼び寄せて、もう一度一線で仕事をすることになりましたが、もう時すでに遅し。もう枠組みが決まっていて、もうどうにもならない状態になってしまいました。あの時代、もし秋月悌次郎が蝦夷地に送られず、会津藩の中枢にいたら、いろんな意味で幕末の姿が変わっていたのかもしれません。戊辰戦争に象徴されるあの時代っていうのは、容保公を初め周辺側近の話が中心になりますけど、そういう中で、実は私自身、キーパーソンは、まさに秋月悌次郎だったと思うんです。キーパーソンの動きっていうものが非常にこの情報の世界では意味を持つんだなというふうに実感するんです。

大切な足元をみる

朝の情報番組「あさイチ」という番組に出ていた時、私にとって一番有益だったなと思うのは、自分がこれまで向き合ってきた報道の世界っていうものが、いわばマスメディアが仕事の主戦場のような気がしていたんですけど全くそれは大間違いだった。政治経済社会と国際のニュースを扱っているから世の中知ったかのように思ってしまうと、それは錯覚に過ぎない。実はもっと身近なところに社会を構成している重要な要素があるということを日々取り上げるその生活情報のテーマを通して実感させられました。メディアで特に報道の仕事をしていると、何となく分かったかのような、いい気になるんです。でもそうじゃないとんでもないことが、身近なところ、世の中で起きているんだって。特に生活の中で言えば、健康の問題もそうですし衣食住の問題もそうです。あるいは子育ての問題もある。医療の問題もある。医療というのは、ニュースも密接に結びつくので、子育てなんかもそうですけど、そういったことを先ほどのアメリカの政治を話したときに、ワシントンという政治の部分から見てるけど実はアメリカ国民という目から見てないっていうのと同じです。実は一番大切な足元を見てなかったってことに気づかされました。

本物を見極め「捨てる勇気」を持つ

我々は自分と同じ意見、あるいは立場の人に対してばかり意識していると、果たしてそれがいいことなのかどうか。情報を集めるときもそうです。自分に都合のいい、自分が受け入れやすいものを集めたがるんです。人間って、反対とか、あるいは批判されることに時間を取られるのが嫌なんです。だからそういうものは、近づけようとせず、どんどん捨ててしまいます。そうすると都合のいいものだけで自分の認識が出来上がってくる。でも今お話したように、世の中そんなもんじゃない逆のものがあるっていうことを意識すれば、むしろその方が大切なんです。逆のもの、批判されるもの、会社でもそうです。一般社会でもそうです。自分の言ったことに対して反対されると嫌なんですよ。特にコメンテーターみたいな仕事をしていると、スタジオでよく喧嘩になることがあります。だけど、それが正常だと私は思うんです。そこをネグレクトしてしまうと、やはり世の中、社会が見えてこないし、情報の信憑性を確認する上でも、とんでもない落とし穴に陥ってしまう。むしろ、

情報を集めるときは、自分が思っているものとは違うものを意識して集めた方がいい。反対する声を大切にする。否定されると怒りたくなりますよ。でもそういう声の中に、次に一歩踏み出す突破口を見出すヒントが必ずあります。そこを大切にしなきゃいけない。

それともう一つ、情報は集めるだけじゃ駄目です。今の時代、このSNSの時代、情報は氾濫してます。偽情報、いわゆるフェイク情報もどんどん増えてきてます。最近だと、ChatGPTとか、AIがもう自分で勝手にコンピュータが文章を作ったり、映像まで作るような時代になってきました。それも本物か偽物かもう見極めが難しいようなものがどんどん増えてきてます。言ってみれば、今情報の海で我々溺れかかっているんです。でも情報は集めなきゃいけないわけですからしょうがない。でも、情報を集めるだけではなく、捨てる勇気を持たなきゃいけない。集めるだけじゃ絶対駄目です。集めたものをもう一度ふるいにかけて捨てていくんです。初めてふるいにかけて何が本物か見えてくるんです。さあ、これから先不透明な日常が続く中でどうすればいいかという一つのヒントが必ず見えてくるはずです。いろいろと手間がかかります。時間もかかるし面倒くさいです。でもこれを繰り返していく以外に、多分今の時代、明日どうなるか、この先自分の生活あるいはこの国がどうなるか考えたときに先が見えてこないはずです。非常に単純なことです。一生懸命向き合っている現実の中に何が本物かを丁寧にせっせと見極めて、それを自分の頭の中で整理して、血肉にしていく。その作業を繰り返しこういった不透明な時代を生き延びる術はないんじゃないかなというふうに思います。

ジャーナリズムの役割

最後になりましたけど、メディア、ジャーナリズムの仕事をしてきた根底には、我々に付託された役割というのは何なのかって考えると、何があっても、戦は起こさせない。特に会津の人間ですから、戊辰の役で会津が焼かれたりしたようなことは、二度と繰り返したくない。これは今の時代にも共通します。どんなことがあっても、戦争だけは避けなければいけない。このために、ジャーナリズムあるいはメディアがあるって言っても過言じゃないような気がするんです。そのためにどういう情報を、まさにインフォメーションじゃなくてインテリジェンスを駆使して、それを多くの人に伝えることができるかっていうことが我々に課せられた使命ではないかなと思うんです。私ももう1977年にこの仕事に入って去年70歳を過ぎて、いつまで続けられるか分かりませんけど、それが自分に課せられた役割であり、使命なのかなというふうに思っています。ご清聴ありがとうございました。

【おことわり】

本稿は、2024年３月27日に一般財団法人とうほう地域総合研究所、公益財団法人福島県産業振興センターの共催、株式会社東邦銀行の協賛、福島民報社、福島民友新聞社の後援により開催された「とうほう地域総合研究所 定期講演会」の要旨を当研究所の文責でまとめたものです。